矢澤洋爾の Photo Essay

４：ビーフカレー文化

とある地方都市の街角で見かけた広告である。

新春の初笑いを誘うその企画には何の不満も意見もない。ただ気になったのは「笑門来福」と書かれた札である。じつはこの文言を見るのは始めてではない。ある名の知れた神社で配られていた札にも全く同じ文言が印刷されていた。

「笑門来福」。これは一体何と読むのだろうか。恐らく「笑う門には福来る」と読ませたいのであろう。ならばどうして「福」と「来」との順番が逆になっているのか？漢文の文法では語順は「主語→動詞→目的語, 乃至補語」が正しいはずだ。だから「笑門来福」がもし正しい漢文ならば「笑う門は福に来る」としか読めない。それがどういう意味なのか解釈はいろいろあろうが・・・・

もし「笑う門には福来る」を漢文で書きたいのなら「福来笑門」と書くべきだ。または「笑門招福」と書いて「笑う門は福招く」とすべきである。

この事を子供達に話すと「そんな事を気にするのはお父さんだけだよ。」と言う。しかし私はこの事例が日本文化のある意味本質のところをついているように思えてならない。自分等の古来の独自文化を卑下する一方で、海外から輸入した異文化をあたかも自分の物であるかのように咀嚼してしまう厚顔さを持ち合わせている一種独特の柔軟さでありしたたかさ・ふてぶてしさである。

「笑門来福」と一応は先輩の中国文化に敬意を表しているかのように振舞っているが、実は屁とも思っていない。心の中では厳然と日本独自の「笑う門には福来る」が主役で居座っている。だから「券売機」などと堂々と書けるのだ。「来福」と言う勇気があるなら、せめて「売券機」と言って欲しいものだ。お隣韓国では中国文化への畏敬の念がそうさせるのであろう、切符を売る場所は「買票所」と表示されている。

そうかと思えば自分等が考え出した文字を「かな（仮名）」と呼び「あくまでこれは仮のものです。」と卑下して見せる。朝鮮半島では自分等が考え出した文字を「ハングル（偉大なる文字）」と呼んでいる。

南蛮インドから輸入したカレーという料理も日本人は自分等のものにしてしまった。ビーフカレーがその象徴だ。ヒンドゥー教を信じるインドでは牛は神聖視されその肉を食するどころか乳さえも飲まないと言う。そんな牛肉をカレーに入れてしまう日本人はやはりしたたかだとしか言いようがない。

それにしてもレストランで食事をするとき「パンですか、ライスですか」はやめて欲しい。どうしても英語を使いたいのなら「ブレッドですかライスですか」と言うべきだ。私はいつも「ご飯をお願いします」と答えているが。

「パンですかライスですか」と同じ構図をしているのが左の図。札幌ビール園のコースターの図柄である。中央の「BIER GARTEN」、これはドイツ語でビールの本場らしくてよろしい。しかしまわりに書かれている言葉はどうして英語なのか？どうせならドイツ語で統一して欲しかった。ドイツ語で統一出来ないくらいなら英語で通すべきではないのか？

分りもしないのに中途半端に外国語を使うのは如何なものか。

札幌の地下鉄に南北線というのがある。その線の北の方には「北12条」「北18条」「北24条」「北34条」と言った名前の駅がある。この線に乗っていたら、車内の「次ぎは北24条、北24条」という案内放送の後に「The next station is Kita Nijuuyon jo, Kita Nijuuyon jo」と英語の放送が続いた。いかにも「私は英語で言ってます。」という感じのアクセントで。この放送は一体誰のためのものか？もし英語圏の人達のために英語放送をやっているのなら「The next station is Kita twenty forth street.」と言ってあげるべきではないだろうか？英語圏の人々は「北」という文字も「条」という文字も読めないかも知れないが、少なくとも「24」が「twenty forth」であることは分るであろうから。

そんなことを考えながら漠然とテレビを見ていたら、ある歌謡番組が中国系の歌手の名前を漢字では「姓名」の順に、カタカナでは「名姓」の順に紹介していた。

ああ、ビーフカレー文化日本！！

(2007.2.4)

追記：調べてみたら「来」という漢字には「きたす」という他動詞の意味があって、「こさせる。まねく」という意味があるそうな。（学研、漢字源）だから「笑門来福」は「笑う門は福きたす」と読んで私の提唱する「笑門招福」と同じ意味・構文である、ということになる。失礼しました。